

ぶくろく

依光良三氏は、高知大学農学部教授でありながら写真の腕前も玄人はだしである。今回の編著作『流域の環境保護』では、氏の専門である森林環境政策の研究と調査地の迫力ある写真が見事に融合されている。それゆえ本書に目を通すと、内容の面白さだけでなく、そこで語られる風景や人物そして事件をとらえた多くの写真が我々を知的に刺激する。フィリピン・セブ島で再生されつつある水源林、中国・黄河上流における土壌浸食の惨状、四万十川の心ならず清流等、ここでお見せできないのが残念である。

さて、本書の主題は、森林を基点にその下流域である川や海を射程に入れ、環境を守るために立ち上がった人々の行動を通して未来への可能性を探ることにある。一章は総論で、流域という単位的重要性を確認した上で、各地の動きを総括的に記述している。二章以降は各論としての事例分析である。まず二章では、高知県・四万十川流域が取り上げられ、家地川ダム撤去運動、FSC森林認証に挑戦した梶原町、川を生かした地域振興に取り組む十和村と西土佐

村等が取り上げられている。三章では愛知県・矢作川流域の住民と行政の協力による流域管理体制、上下流の連携による水源林造成、静岡県・興津川での都市住民と林業者が一体となった森林管理の試みなどが分析されている。最後に四章では、中国における近年の大規模な緑化プロジェクトが、黄河や長江の事例をもとに検証されている。

が、長年かけて各地を歩いて獲得したこの事実が、編著者らの研究成果の凝縮である。矢作川方式と呼ばれる環境保護システムはその代表例である。民間団体と行政とのパートナーシップの下で、徹底したアセスメントと住民参加による意志決定を特徴とするこの方式は、資本対農漁民という長年の対立を超えた流域共同体としての社会のあり方を提示している。こうしたモデルを通して、上流から下流までの流域という繋がりを持った人々が共に努力する中でこそ良好な環境が守られることが語られる。

『流域の環境保護 森・川・海と人びと』

依光良三編著（日本経済評論社）

環境保護の為に川や海にまで視野を広げるのはそれゆえだ。さらに「地域資源や共有的環境資源は広範な人々が守り育てるものだ」という主張がこれに続く。本書の副題が「森・川・海と人びと」であり、各地の事例においても様々な人々の環境を守る取り組みが注目されているゆえんである。そうした多くの事例を分析した結果、グローバル化が進展する中で環境保護運動が対立的な「運動」から協動的な「参加」へとシフトしていることが明らかにされる。簡潔にまとめるとたったこれだけのことである

本書は依光氏と彼の教えを受けた若手研究者達による共著である。一次産業が地盤沈下し農村が疲弊する中で、しかし、この研究者達の森林と環境保護に向ける眼差しには曇りが無い。

それは、アジアや日本の各地で調査し、十分な分析と議論のうえで本書が編まれているからである。編著者依光氏の努力によるところ大である。しかし、良き師と良き仲間に関われた研究環境であればこそ、若い研究者達の共同作業によって、まとまりのある研究書を世に送り出すことができたのではないだろうか。そんなうらやましさを感じさせる好著である。

（二〇〇一年九月、二四五頁、二、〇〇〇円）
（京都大学農学研究科 助手 大田伊久雄）